

帝京大学学生のための「日本経済史」入門講座

第三回 資本主義とその様相に関する若干の覚え書き

佐藤光宣

第一章 はじめに

資本主義 (capitalism) についてのごく有り触れた論考をここに取り纏めるにあたって、それなりの筋の通った執筆動機とその構成上の全般的体裁について述べておくことが、やはり適当と思われる。ことに、このような小論——内容と形式に現れている——が帝京大学文学部史学科紀要「帝京史学」の掲載に与るからには、これを著すに至った学問的経緯なり事情の一端についても、是非とも最初に触れておかねばならないであろう。

平成十九年度の講義担当科目——私に課せられた文系学部二年生以上の学生諸君を履修対象者とする——は、「日本経済史Ⅰ」および「日本経済史Ⅱ」である。履修登録者の多い順に列記すると、文学部、経済学部および

法学部という具合になる。実際の受講者となると、文学部史学科に在籍する学生諸君が実数において最も多い。けれども、講義における学生諸君の熱心さは所属学部学科の別なく上々に維持されており、その任に当たる私は、講義後に研究室にて独り笑壺えっぼに入ることが少なくない。

「日本経済史Ⅰ」（前期）および「日本経済史Ⅱ」（後期）の講義時には、敢えて、特定の書物をテキストとして用いてはいない。但し、参考文献は、多岐にわたって多数のものの紹介に努めている。学生諸君は、これらの参考文献を求めて立派な大学図書館その他に日参したはずであるし、講義に臨んでは配布プリントをテキスト代わりとして活用してもらった。それゆえ、講義の前後における配布プリントの熟読——予習および復習——、また講義中に速成したノートの再編成ないしはその内容的補強等々に努める能動的な心構えが、まずもって求められた訳である。また、聴講態度は静粛をもつて良しとするとの開講時の揚言は在り来たりのものではあつたが、これについてはその不要であることが次第に了解されることになった。実際、履修者のうち毎回欠かさずに出席した学生諸君は、右に述べた諸事すべてにわたって励行怠りなかつたと見られたからである。その上で、学生諸君の内面にもともと備わっていた意識が経済生活の歴史を振り返る知的な経験に慣れ親しんでゆく姿は、何よりも好ましく思えた。そのような学生諸君の大多数が好成績をもつて単位を取得し得ることは十分に得心しうるし、半ば必然的とさえ言えよう。

勢い、講義担当者である私自身としては、そのような学生諸君の知的好奇心をさらに満足させねばならなくなつたし、配布プリント以外に講義の主要内容を取り纏めた私自身の論考が必要になつた。それは、「日本経済史」講義を一段と掘り下げた内容を備えねばならなかつた。そこで、資本主義の生活過程が含む諸問題に鋭く切

り込むについて、ソースタイン・ヴェブレン (Thorstein Veblen) の経済学の考え方に依拠することにしたのである。とりわけ、ヴェブレンの名著『有閑階級の理論』(*The Theory of the Leisure Class*, 1899) は、格好の知見を提供すると考えられた。もとより、自分自身で曲がりなりにも思索を重ね、借り物でない事例や言説によって平易に、目的とする論考を纏めねばならないと決め込んだ。論考は、今回も「講座」と冠される範疇に入るものの、講義そのものの蒸し返しでは意味がないからである。それは、できうるならば、講義以上に知的平面を一層高所に広げるものでなければならなかった。このような趣旨で論考は形をなすべきものと考えられたのである。そもそも、この趣旨のもとに、文学部史学科紀要「帝京史学」第二十一号¹⁾と第二十二号²⁾に所収の二つの論考は著されたのであった。したがって、「帝京史学」第二十三号(本号)所収の本稿は、それら既発表の二つの論考と、内容的に一貫性を備える予定のものなのである。ここに、本稿を執筆する趣旨ないしは学問的経緯らしきものがある。意義込み通りにその趣旨の実現を見るかどうかについては少々疑わしさが残るかも知れないが、こればかりは未定である。もつとも、趣旨を問うたところで、この論考が学生諸君に何ら益するところがないならば詮無きことと思われる。この「講座」の目的とするところは研究業績の微々たる積み上げではなく、本稿の副題——資本主義とその様相に関する若干の覚え書き——通りの意味に留まるであらう。

「帝京大学学生のための『日本経済史』入門講座——第一回 ソースタイン・ヴェブレンとその発展段階説——」と題する「帝京史学」第二十一号に掲載された論考は、ソースタイン・ヴェブレンの発展段階説を中心に、その経済思想の一端や略歴を取り上げたものである。ヴェブレンの発展段階説は歴史を見る一つの枠組みであったが、それは日本の経済生活の歴史を検討するうえで極めて重要な論点を提供した。それは、有閑階級の生成と発展が

論じられる歴史の舞台でもあった。

「帝京大学学生のための『日本経済史』入門講座——第二回 ソースタイン・ヴェブレンと文化の進化——」と題する「帝京史学」第二十二号に掲載された論考は、ヴェブレンの発展段階説において製作本能がいかに発現するかについて考究したものである。この試みは広い知見を要する点で執筆に難渋したが、ともかくも出来上がった論考は、ことのほか長大なものとなつてしまつた。⁽³⁾それは原始的未開文化の段階から現今に至るまでの生活史の概貌を、文化的進化の系列に沿つて論じたものである。その過程で、狩猟の在り方、武器とその製作技術、原初的な「戦争」とその変化が個別的に取り上げられた。そして、江戸時代の経済生活に資本主義的な経済制度の萌芽を見出しうる可能性を若干指摘して、論考の守備範囲を終えたのであつた。

実際のところ、如上の既発表の二つの論考においては、資本主義に関して誰もが抱きうるであろう臆気な観念——資本主義の厳密な概念規定とは言えないばかりか、心象風景に近いかも知れない——に頼り切つて論議が展開されている部分が皆無とは言えない。その論考の適切な箇所で資本主義とは何かについて触れておくべきであつたらうし、それゆえ脚注で説明を付加する予定でもいたが、いずれも果たせなかつたのであつた。私はその理由を、自分の能力の欠如に唯一求めねばならないところを、時間のないことの見出して断念していたのであつた。

今述べたことは十分に証拠立てられる。というのは、その後自由な時間が確保されたにもかかわらず、資本主義に関する自分自身の知見はさほど広がることなく平成十九年の夏期休暇を迎えたからである。資本主義的なんたるかについて説き起こすことは、私にとつては未だ極めて困難であり、浅学の身の総力をもつてしても超え

られないと見られたのである。困難であること以外に、既に出来上がって機能している資本主義を、古色蒼然とした厳密な定義のなかに押し込めることは如何なものかとも思われた。増して言わんや難解にならざるを得ないその説明は、学生諸君の目に留まり脳中に宿り続けてゆくものとは到底考えられなかった。

それゆえ、学術的な精確さを些かも損なわずに、同時に資本主義の現実の姿を学生諸君に対して語らねばならなかった。そこでまずは、全体として読むに堪えうる程度の学術論文の体裁を論考全体に施すべきと考えた。そのうえでなら、かなり自由にものを語ることが許されると思ったのである。だが、次第にこの序列は転倒し、学生諸君の知的好奇心の満足に裨益することを第一となすようになっていた。そうなってみると、具体的な経済生活の様相を平易に説明するについては、標準的学識のテキストでは隔靴搔痒の感を禁じ得なくなった。そこで、いつしかヴェブレン的なものの方が全面に押し出される方向へと進んだ。そして、「帝京史学」第二十三号への掲載を夏期休暇後に願い出るべく、論考の執筆にようやく取り組むことになった。⁽⁴⁾

さてそこで、日常の経済生活のなかの珍しくない出来事を取り上げて、資本主義とは何かについて考える糸口はないものかと、夏期休暇の中頃に至るまで思案し続けていた。その炎熱焼くが如き猛暑が身体の隅々まで染み渡った頃、新聞紙上を賑わす出来事が立て続けに起こった。それこそ、資本主義とは何かについての味気ない論議に、眠気覚ましの活力を与えてくれるような事例と思われた。実際のところ、その種の出来事は資本主義経済社会に固有のものなどではないのであろう。けれども、あまり程度の良くない要素を含んでいると思われた種々の出来事は、資本主義経済社会の一面を鮮烈に指し示すかに見えたのであった。

そこで私は、それらの出来事の当事者および関係者の名譽を傷つけることのないように配慮しつつ、慎重な言

い回しでこれを取り上げることとした。そのことよって、当事者——有閑階級ないしは副次的な有閑階級の成員、およびそれらの取り巻き——の気高い金銭的名誉が萎しぼんでしまうことなどあり得ないと思われたのであった。誇りうるほどの金銭的名誉の所有者であり、その取り零こぼしを嫌い、その残骸の収集にも敏であるからこそ、彼らは格好の事例として本小論に取り上げられる価値が認められたのである。

ところで、私は市場の機能的側面に一定の評価を与えるものであるが、極端な「市場原理主義者」ではない。さりとて私は、「マルクス主義者」でもなければ「過激な思想をもつてする戦闘的活動家」では決してない。さらに私は、沈黙考の挙げ句、自分だけにしか理解できない論文の山を築く能力にも欠けているらしい。ただ、ソースタイン・ヴェブレンの経済思想に理性的に傾倒しており、その精神の一端に触れたいと常々渴望しているに過ぎないのが自分である。

それゆえひとまず、気恥やぶずかしさを覚えるものの、私は自らを「制度主義者」と称することに吝やぶかでない。だが、厳密に言えば、それは詐称である。制度主義者という括り分けは、あまりに緩やかに過ぎるからである。また、昨今、制度主義者のなかから「市場原理主義者」が生まれ出そうな勢いでもあり、玩具箱のように一切台切を放り込まれた「何でも屋」という含みを制度主義者は負わされかねない情況だからである。そこでもし可能であるならば、私は「ヴェブレン主義者」と自分自身を称したいほどなのである。それが学名になりうるならば、自身の姓名の横に「ヴェブレン主義者」と常に併記してもらいたいとも思う。墓碑銘として記されるなら、さらに結構なことである。しかし、まさか、それは私の学名にも墓碑銘にもなるまい。思うに、学名の方が遙かに通りの良いのが難点なのであり、また墓碑銘にその名を刻まれることをヴェブレン自身が良しとしないであろう。

からである。

但し、ここで若干の注意を喚起しておかねばならない。それは、何々主義の頑なな信奉者に成り果てた挙げ句に知的胸襟を開き得ず、自由な運動を欲する思惟すべてが内部処理され新しく出るところを見出し得ないのでは進歩はない、ということである。私はこのことを自覚しつつ「ヴェブレン主義者」として自由に思考を巡らせようと思ふし、常にそうしている。それゆえにこそ、現今の経済生活に向けられた思考の矛先は、「不正」や「まやかし」に対する静かな怒りとして論考に取り上げられたのである。

なお、この小論を著すにあたって私は、型通りの手堅い形式を取り得なかった。次章以下の諸章は、どこから読み進めても論考全体の理解に支障を来すことがないような構造になっている。このことは、学生諸君の気儘な向学心に便宜を図ったための成果なのではなく、取り上げた課題が余りにも広漠としているために各個撃破によって臆見を呈する以外に方策がなかったのである。論考の形式が決したのは、このような経緯においてである。

それゆえ、論考の副題は「資本主義とその様相に関する若干の覚え書き」とした。そこでの論議の素材は有り触れているものであったり、やや珍しいか、この場にそぐわないと思われるものを含んでいる。脚注も、一部の例外を除くと比較的簡素なもので済ませた。学生諸君は、何気ない卑近な例の前後に、高尚を装った風やや学術的ないしは術学的な叙述に出会すことにもなる。そのうえでなんとか体をなす論議は、それに見合つて雑駁なものになった可能性がある。それはそれで、意味のあることなのである。というのは、講義の主たる内容を理解するについて、講義科目名——「日本経済史Ⅰ・Ⅱ」——が厳密に指し示す範囲に論議の全体が留まつていたのでは、理解の及ばない経済生活の局面に出会すに違いないからである。とは言ふものの、論考には新たな学問的

発見や知見も含まれていない。何より、資本主義とは何かについての考え方の手がかりが、学生諸君において自発的に見出されることをもって論考の目指すところとしたのである。例によって回りくどい文章は、前作と同じ理由で変えることをしなかった。

第二章 資本主義的生活過程への若干の注釈

今日、資本主義は一定の経済システムとして見事なまでの成長を遂げた。その資本主義は、価格が日常生活の展開軸となるような生活体系の経済的組織化の達成に向かう。これは資本主義の主たる営為である。経済的組織化の過程で前面に押し出される効率性は、資本主義に精気をもたらす指導原理を構成するように思われる。経済的組織化の累積的効果は、価格をめぐって展開中の人々の生活史を、なすがままに——自由に——することによって経済活動の基本的性質を決定する。こうして、資本主義の様相は、それが「価格体制」(price system)と称するに十分な資格を明示することとなる。

現在の資本主義は金銭的な文化の体系を色濃く備えるに至っており、経済は言うに及ばず、法律、政治、宗教、教育、スポーツおよび芸術等々の文化を構成する諸要素は、その体系のなかに系統的に配置され有機的に関わり合っている。ここに形成された文化的環境は人間の性質と行動に対する規定性となるが、同時に人間はその環境に働きかける能動者ともなる。金銭文化の環境においても、人間はそれなりに主体性を発揮するものなのである。こうして環境と人間は相互作用を演じ、なお一層の金銭文化の盛行に向かって互いに拍車を掛け合うことになる。

このような資本主義の有り様とその文化的性質からして、広範かつ複雑な生活過程の重心は経済活動の金銭的局面に集まることになる。経済活動を営む基本的単位としての各経済主体は、個人はもとより企業や国家といえども、金銭的思考習慣 (pecuniary habits of thought) の累積的再生産過程に非接触ではいられない。この局面においては一種の文化的欲求と見て取れる心理的力学が発生するらしく、金銭的事態に立ち至ったことそれ自体が無感覚のうちに受容され、そのことがまた金銭的情况に対する消極的批判ないしは暗黙の支持に回りうる精妙な力学を、副次的に発生させるかのようである。次第に金銭的思考習慣は隆盛を極めるであろうから、立ち至った任意の金銭的平面に各経済主体は据え置かれることになる。結果として、各経済主体は金銭的思考習慣の累積的再生産過程に放り込まれることを余儀なくされるが、これを良しとする大勢的意見に人は抗することができない。程なく、金銭的営為を發揮し助長することを常とする情況が全面的に開かれ、これに対する賛成意見が醸成され、金銭的思考習慣もまた成長する。

このような経済生活の全般的な経過説明はいかにも大雑把で模式的に過ぎるが、まずはそのようにして、事は流れてゆくものと思われる。結局、達成され維持される金銭文化の活力ある総体が、資本主義というシステムの安定性を図ることに寄与すると見られるのである。そのことがまた、資本主義システムを何某かの信頼なにかしを置けるものにするのであろう。したがって、金銭文化に対する疑義や辛辣な批判は資本主義から榮養分を刮くぎ取るような効果をもつものとして、この体制のシステム管理者——有閑階級ないしは副次的有閑階級の特定の構成員、および有能な官吏等々を含む——の警戒感を助長することが常となる。

金銭文化の生活過程は長きにわたって継続してきた。今後もそれは続きそうである。そうこうして、金銭文化

は一定の歴史の段階を画すのである。いわゆる資本主義の時代がその段階に重なっているのである。いかなる文化段階の生活過程であっても、それは個人的な些事および社会的な種々の出来事は一切合切の集積として営まれるが、そうした事実から生活過程の特質を導き出すことは実質的に不可能であり無駄な努力である。生活過程のなかから取り上げられるべきは、制度的所産ないしはその派生物として容易に認知される典型的な事柄が効果的である。それらは金銭的香気を放つものであつて誰にでもそれと分かる類のものであるから、とりわけ現行の生活過程の特質を理解するには誠に効果的なのである。本稿では、このような観点から複数の人騒がせな「社会的な出来事」が取り上げられる予定である。確かにそれらは、「金銭的出来事」として分類されうる社会性をもつた出来事である。したがつて、これらは真摯に検討されねばならない。

取り上げられるべき制度的所産ないしはその派生物としての事柄は並立しながら個別性を有しているが、その一切合切の有機的集積が、詰まるところ歴史を構成するものと考えられる。そうした歴史を抽象化する思考の過程では、個人的かつ日常的些事は取り立てて拾い上げられるべき対象とはなりにくいようである。それゆえ、歴史という一括りの言葉は無視できないほど成長した制度によつて決定される生活過程全般の流れとして、これを受け止めることも可能であり、恐らくそれは妥当な取り扱いと言えよう。この場合の制度とは「金銭文化の体制」と一致する。それゆえ、本稿では、「資本主義」の金銭的側面について、標準的学識の範囲を超える論究がなされることにならう。それは、権威ある経済学の教科書には明らかに不足しているか意識的に排除される要素なのであろうが、現行の「資本主義」の理解には欠くことができないと思われる。

確かに、資本主義社会における利潤獲得の運動——経済活動——は、その体制が含むであろう前時代的な制度

的残骸の排除に寄与する面があるが、同時に文化的多様性の金銭的再編成を通じて何かしら統一的な方向に歩みを進めるかに見える。この運動は累積的変化過程そのものであるから、過程それ自身を基準として発生的に考究されるべき性質を資本主義はその内面にもついていると見られる。そのような側面に着目するならば、一見したところ、資本主義は国情と地域性において微妙にその色合いを異にするものの、その生活過程で現れた経済制度は同じような顔つきを備えているかに見えてくる。この限りで、資本主義は、よほど強靱な性質をもっていると言わざるを得ない。つまり、資本主義はどこでも生きていけそうなのである。さりながら、同時に、個人的な風貌を資本主義は自らに体现すると見られもする。これらの点から見て、資本主義の制度は特異な柔軟性を備えていると言えよう。少しばかり言葉を補足すれば、それは文化的微細構造に即してどこまでも変容し成長しうる柔軟性ということになる。

このように、資本主義は単なる経済のシステムではなく、金銭的妥当性という求心力に拠って非金銭的な種々の文化までも付き従わせる、強靱で躍動的かつ普遍性をもった文化システムである。再言するならば、それは価格体制と言ってもよい。さらにそれはまた、悠遠な人類史のなかの最近時に出現してからのというもの、紆余曲折を経ながら成長を遂げてきた。現今では、資本主義システムが手にした莫大な生産能力は、時として自らを御しきれないほどである。このことは、この体制に付き従う生産の目覚ましいスピードや洗練された生産組織等々が生産効率を競う土台として据え置かれているのみならず、生産力の「効率の意識的撤収」(conscientious withdrawal of efficiency)によって価格を維持し利益を確保する手立てとして逆用される事例に見て取れる。このことに無感覚でいられる人間を、善良な人間の思考習慣に働きかけることによって継起的かつ大量につくり出す

ことを可能にしたのも、資本主義という文化システムである。

見てきたような具合であるから、「営利主義目・市場原理墨守科・大企業属・大量生産型社会種」——現行の資本主義経済制度——は、今後も既定の路線に沿って展開してゆくことになる。それが安定的で持続的な社会建設に寄与すると断ずる勇気を、今のところ私は持ち合わせていない。そのような勇気は、今後也不要であろう。というのは、資本主義は一定のシステムとして稼動している以上、その経年変化を避けることはできないからである。その上、かかる変化は常に劣化を含むものと認識しなければならぬからである。

しかし、資源の浪費と枯渇、地球の破壊——特定の環境破壊では収まりきらない——が資本主義経済システムそれ自体の劣化ないしは障害に抛るものと問われれば、これに対して闇雲な肯定的意見を感情的に発する訳にはいかない。システムの劣化や障害と言うなら具体的に根拠をあげねばならないが、目下のところ、それは順調な外観を呈している。そもそも資本主義システムの順調な稼働は、それ自体として、資源の浪費等々の諸問題と相携える関係に置かれたときに、最もその効率を発揮するのである。浪費を産出する効率も、資本主義がシステムとして好調な時は高く維持される可能性がある。ここで、些か心許ない確信に基づいて包括的陳述が許されるならば、資本主義のシステムは何かしらの手立ての下に上手く機能してきたのであって、その積み重ねによって現況がもたらされたということである。成功と失敗は、お互い同士が良き理解者でもある。それらは良く結びつくのであろう。

ここで約言すると、資本主義のシステムが円滑に作動したからこそ、資源の浪費等々の諸問題が現れたし、また広範に見られるのであろうということになる。そして、現れ出た浪費と資本主義のシステムとが、いよいよも

って持ちつ持たれつの関係に入り込んだと見られるのである。それゆえ、資本主義のシステム障害とは浪費等々の果実を自ら吸収し得なくなつた際に、深刻なものとして実像を現すと思われるのである。

資本主義の刮目すべき様相は、生産のそれである。それは法外な生産力をもっている。ここでは、生産が利潤の観点から行われる。しかしそもそも、生産は社会の必要によつて調整されねばならない。この上限を事も無げに突破するのが、資本主義の生産システムである。むしろ、利潤追求の圧力は生産の無政府性に拍車をかける。たとえば、その結果生じた外部不経済——公害——はコストの発生として取り扱われ、これは財の価格への転化によつて、あるいは政府補助金の支出で賄われることもある。これはかなり手の込んだ浪費であつて、資本主義はこれなしではシステム障害を引き起こすと見られるのである。資本主義がシステムとして上手く機能していると表向き見えるのは、この他の幾重にも張り巡らされた精妙な浪費のシステム——既存の浪費の、新たな浪費による撤収——のお陰であろう。やがて資本主義は、そのシステムの表向きの成功ゆえに浪費を支えきれなくなり、失敗に至る道筋を大股で前進する可能性を大いに残している。

ここで問題となつた浪費に関して我々は、些か無感覚な経済主体となるように慣化されたかに見える。我々は、恐らく、金銭的思考習慣を完璧に制度化してしまつたのであろう。金銭的規準の瀾漫びまんとその政治の世界への波及、人心の荒廃等々がこの後に続くものと思われる。このような累積的な生活過程の効果は、たとえばそれが副次的なものであつたとしても、価格体制としての資本主義の様相を鮮明にするであらう。こうした事柄の延長線上に描ける資本主義の筋書きが栄光に満ちたものであつたならば、それは絵空事に過ぎない。金銭の恵みの力が、欲望の殉教者を生み落とすように予定されているのであろう。金銭的王国——欲望の体系と称するに相応しい——は

到來したかに見える。足を知り、この王国を恐れる者であれ、と我が身を省みる。

この資本主義という経済システムのなかに人として生を受けた我々は、個々に長短と快苦の別を経験し、挫折と希望の振幅に身を委ねるのが通例であるが、いずれにしても帰泉するのが決まりである。これから逃れられた者は、誰もいない。ローマ皇帝であろうが、中国皇帝——彼らのうちのある者は水銀を不老不死の薬と信じた——であろうが、例外なく没世した。『揚子法言』に曰わく、「生ある者は必ず死あり」。今後も、この定めを超える者は現れないにもかかわらず、待ち構えるその帰結の当事者になる自覚は、よほど切羽詰まらない限り各人に芽生えないように出来ているらしい。あるいは、資本主義システムが自分の生命過程そのものであるとする、潜在的な心理的情況に人は浸っているのかも知れない。多幸症的心理からすれば、それらは続くべきものであり、終わる時まで健全たりうる、などと突き放されるのが落ちである。議論の余地は実質的に存在しないのであつて、心の安寧に至ろうとする実に奇妙な心の情景が存するのみである。こうした心の構えは、現実への誠心誠意の逃避と言ひなすことができるかも知れない。言い得て妙であるが、これは先入観が果たす一つの機能であろう。この先入観から自由ではない点では、私も人後に落ちない。資本主義経済システムにしろ自分の生命にしろ、それらは差し当たつて存続すると思ひもするし、それらはともに健全に稼働しており、疲労や疾病および老朽化は、さほど深刻な状態に今すぐ立ち至るとは思わない傾向がある。

このような情況に加えて、資本主義は一国の経済制度の枠内で語られるべきものではなくなつた。それは複雑ではあるが高度に統合された世界システムに成長を遂げつつあり、また当面は絶えることなく続けていけるもの、

と認知されるまでになった。そのシステムの稼働過程で現れる景気循環における停滞、不況および恐慌といった攪乱は、正常状態からの一時的逸脱であると暗黙のうちに了解される——これも一つの先入観の効果である——ことになった。その程度のものが資本主義経済のシステム変動であるならば、種々の攪乱は耳障りは悪いが心配無用となり、それに基づいて出来上がる叙説とやらも余り深刻なものとはなり得ない。それはどことなく余所行よせきで復古趣味的感興を誘いはするが、正規性の先入観の賜であることからして知的な人々の理解を超えたものになろう。だが、資本主義の無反省な擁護ないしは礼賛が主たる目的であるならば、それは研究業績として立派なものに上昇転化するかも知れない。ここでは、景気循環の過酷な側面は忘れ去られる。

ともあれ、その暗黙の了解事項は、なお一層の先入観に成長するのである。それは、普通の人々に留まらず高名な学者ないしは誠実な研究者にまで及ぶ。したがって、熱心な学生諸君であればあるほど、特定の先入観に接するチャンスが増える。この限りにおいて、大学とは誠に危うい知的現場であるとも言える。それゆえ、肝要となる心構えは、特定の先入観に取り込まれる可能性が絶無でないことを自覚し、自分をそこに埋没させないことだ。先入観は公平なものの方々に偏向をもたらす点に十全な機能を發揮するが、これはそもそも知的活動の鈍化ないしは停止に我々を導き、またそのことによって偏見を生み助長するからである。「偏見を排し幅広い知識を身につけ」⁽⁵⁾ることこそ肝要である。これは至言である。

経済的攪乱が正常状態からの一時的逸脱であるとする先入観は、資本主義経済システムが心配のないものであり遅滞なく健全に運行するものだととして、そのシステムの概観を眺める者の確信に奉仕している。この先入観が根底から疑われることは、まずないであろう。まして、金銭的利益を生み出しているとなれば、このシステムに

替わりうる経済システムの在り方などは想像力の及ばない範囲のものとなる。そもそも、それは視野から消失しているであろう。少なくとも、差し当たって、それは変わる必要がないとされる。このことは、公の確信すなわち制度を形づくるであろう。

この段階に至ると、経済生活を取り巻く自然的、社会的および文化的環境は恰も資本主義システムと無関係のように扱われもするし、それらの環境の諸変化といえは許容範囲なるものに収まるように取り扱われ、これで良しとされる。これは甚だしい見込み違いであり、このことがまた先入観を構成する。生まれ出たこの先入観によると、経済活動の一切合切が地球環境に対して穏やかに作用し調和的である、と考えられることになる。さらに言えば、下手に経済活動に介入すれば調和を乱すとさえ主張されかねない。これらの見解もまた、既にある先入観を強化することに仕える。帰するところ、先入観は驚くほど強固に成長するものである。それらの先入観は、副次的ないしは代行的な先入観を生むこともある。先入観は、累積的に次の段階を指す本性を持つていたのである。差し当たり、二次的な先入観は、主たる先入観に疑問を差し挟むべきではないという勢力として立ち現れる。

さてそこで、資本主義経済システムに関する強固な先入観は、一定の思考習慣として制度の座を占める段階に進んだ訳である。となると、この思考習慣のなす事柄もまた自ずと決まってくる。それは、たとえば、資本主義経済システムをもって世界システムそのものとなすという見解に、勢いを与えることである。そして、ついには、その見解自体が未だ見ぬ先入観を惹起させる要因になるであろう。それがいかなる偏見なり実害なりを撒き散らすか実験中というのが現今の実情なのであるが、主導的な資本主義経済システムへの無批判的な追従も、二次

的な先入観として機能し始めている。「現代文明社会におけるローマ帝国」を標榜するかに見える国家とその取り巻きが資本主義経済システムに付着する種々の程度の先入観によって自らを支えているとしたら、それこそ世界は危ういと言わねばならない。そのシステムは、成長すること以外には持続し得ないもの、各種資源の非循環型のものである。それは、浪費の循環ならお手の物である。先に垣間見たように、目に余る浪費は、もはや醜態を晒すに等しい情況に立ち至っているかに見える。むしろ、浪費なしには遣っていけない、というのが実情かも知れない。実に危うさに満ちている。そこで思いつくままに、浪費が進行中の諸項目を少しだけ上げよう。

「人間を含む生物すべての生命」、「食糧」、「生体摂取用およびその他の水」、「間接水——食料生産に必要な水資源——」、「各種エネルギー」、「自然資源」、「資源化可能な一般廃棄物および産業廃棄物の焼却処理」⁶⁾、「廃棄可能物の土中への投棄——埋め立て——」、「生活環境」、「棲息環境」、「自然的景観」、「公共の電波のうちのあるもの」、「無能力の再生産に向けられる訓練のための時間」、「過剰な包装」、「低俗的乱用に向けられる金」^{かね}、恐らくは「投資のための投資」、「税金もしくはは血税——普通の人々の涙ぐましい労力の結晶——」、「各種公的予算とりわけ特別会計予算」、「公的年金保険料の高齢者への作為的非移転部分すなわち横領によって私的に運用された部分」、「非生産的管理への意識的無能力の發揮——効率の意識的撤収——」、「良く訓練された逆機能的官僚制」および「政治資金収支報告書の記載漏れないしは虚偽記載によって生ずる果実——これを修正する際の精神的労力すなわち政治生命についての心配を上回るはずの金銭的收穫物——」等々。

これらの諸項目は、資本主義経済システムに精気をもたらしているかに見える。これらの浪費は些か度が昂進しているから、これに毀損という言葉を追加的に充てても良いくらいである。いずれにしても、ここに上げた諸項目は、この資本主義の生命過程に欠くことのできない栄養素を供給し続けているものと見える。恐らく、それらの諸項目が浪費であるとの認識は、先に述べた調和的な先入観の力によって排除されるか休眠状態に置かれてしまったのであろう。これについては、絶妙な政治的力学——お目零し^{こぼ}——も働いていたかに見える。少なくとも、それは紛れ込んでいたのであろう。

資本主義経済システムは、種々の事柄の無理やりの浪費ないしは毀損により金銭的繁栄を袂り取る遣り口を完璧に心得てしまったようである。この遣り口は、普通の人々が持つ「金銭的競争」(“pecuniary emulation”)の精神と調和している。他方で、出発点における宗教的な熱意と実質は既に空洞状態になって久しい。そのためか、何のための勤労かという真摯な問い掛けには、誰しも真面目に答えられないことになっている。答えに窮した際の最後の抛り所は、「働かなければ喰っていけない」というカピの生えたような常套句である。熟慮の一端が垣間見られるような答えは、これを要求すべきではなかったのだ。むしろ、この常套句の裏面には「金銭的競争」から脱落したくないとの思いが伏在することに気づかされる。「働かなければ喰っていけない」者にして「これ見よがしの消費」に熱意を燃やす事例は、事欠かないものと思われる。「喰っていけない」水準が、高く設定されているのかも知れない。このようなことを抜きにして、なおかつ働いても本当に喰っていけない者は、この種の常套句を吐けないはずである。それは名誉にかかわるからである。

現下の情況は、如上から明らかのように、資本主義の精神は受け入れられ、良く理解され、習慣として定着し

ているのである。したがって、道理をわきまえた良心的な人物でさえ、無意識のうちに「金銭的競争」の勝利者となるべく「金儲けのための金儲け」に身をやつまことにもなる。人はすべからず、金銭的成功に対して高い点数を付けざるを得ない精神構造に慣れ親しんでいるのである。そして、この精神構造を安住の地とする任意の個人が、そこから脱却しようと試みる際には、それ相当の精神的エネルギー——苦痛——を要するのである。そのエネルギーの社会全体の総量——もし把握可能であるならば——は、それこそ計り知れないであろう。

さて、この辺りで一呼吸つくことが肝要である。私自身はもとより、我に返るべき人みなすべて、極端な金銭的情况を反省することが必要と思われる。それゆえ、ここに敢えて『聖クルアーン』(The Qur'an)の一節を取り上げようと思う。私はムスリム (muslim) ではないが、次の短い一節に含まれる奥深い戒めに畏怖の念を抱く者である。

「また(財貨を)使う際に浪費しない者、

また吝嗇でもなく、よくその中間を保つ者。」⁽⁷⁾

我々の生活史の一世代すべては、どれもこれも、過去に生存した任意の人物の生活史の再現とは考えられないし、後の世に生きる見ず知らずの者の生き様に我々の生活史がそのまま再現される可能性もありはしない。それらの再現性は、誰の目にもわかるようにこれを確認できた例たゞしはなく、また今後ともそれは期待できそうにない。恐らく、ある種の必要のもとに、鋭敏な直感と真摯な努力の合力が、「転生者」を生み出してきたのであろう。

誰も彼もが生まれ変わるものではないらしく、その力は、限定的範囲のなかで効力を失うものと見て取れる。どうやら、この種の宗教的営為は、我々一般の生活史に関しては再現性を著しく留保するらしい。したがって、この小論では、輪廻転生などという深遠な思想は取り上げるべき問題とならないのである。同時に、死者として生きる時間の永いなどとする達識然とした主張のもとに、来世に高い点数をつけることもできないのである。

それゆえ、見出しうる帰結は、生物学的見地のみならず如何なる学問的観測地点においても、以下の如く同意の得られるものとなろう。すなわち、我々個々の生活史は再現不可能であるからこそ唯一的に価値を有する、ということである。この意味で個々人の生活過程はいつなんどきでも切迫しており、緊張感に富んでいるはずなのである。この緊張感の高まりは、偉大な精神として押し出される契機を必ずや得ると期待させてくれる。

さて、我々は右の意味で、何物にも代え難い一生涯を送らねばならない。その生命過程において、我々は各々の考え方と行動の習慣に、資本主義という金銭文化の慣化作用を受けつつある。生命過程の主体は我々であり、客体は資本主義システムである。確かにそのはずなのだが、各人は資本主義の機械的ないしは非人間的システムに否応なく向き合わされている。そこから発せられる種のエネルギーを吸収し自発的に反応——たとえば共鳴——を開始することになる。この時点において、既に主客が転倒し始めている。次いで、我々は客体に移行することになるのである。というのは、そのシステムに共鳴したのは我々だからである。けれども、程なく我々は主体的存在に事も無げに復帰する。振動エネルギーを増幅し、これを資本主義のシステムにフィードバックしうる存在に我々は転化したからである。主客が相互に転ずる生命過程のプロセスは、したがって、相互作用のプロセスである。この意味で、資本主義システムは人間の顔を備えるものと見るべきであろう。こうした視点に立つ

ならば、生命過程とは文化の受け渡しのプロセスに他ならない。惹起し進展してゆく相互作用の様式が、資本主義の文化の状態を決定すると見られる。そのもとに生活を営む人々は、各々その思考習慣を、文化の状態に合わせて調整するのである。

文化を構成する諸要素は、人間性の変化をもたらすことを通じてお互いに相互作用すると見られる。⁽⁸⁾ 文化の構造は社会を形づくるのである。それゆえ、資本主義経済というシステムは、これに社会化システムという汎称を併せることで明瞭となろう。むしろ、この小論の文脈では、それらは同義語として用いられても構わない。

今や資本主義システムは、非人間的なものであるにもかかわらず、普通の人々の金銭的営為に十分な居場所を与えている。その金銭的求心力のもとに寄り集まった一群の人間は、ある種の共同体を組織しているようだ。それは共同体とは言うものの、その構成員の感情と空想の力が金銭の力によって分解させられており、真の公共生活に精神的営力を注ぎ込むことができない力の戯れというべき擬似的生活空間である。それは得体の知れない新興宗教の活動のなかに、良く場を見出す。ここでも特定の社会化システムが、その効力を発揮すると思われる。

どうやら、資本主義システムは、血の通わない他の副次的システムを生み出す可能性があるらしい。そのシステムは金銭的および物質的条件を決定するとともに、真の公共生活とは相容れない、頑迷で絶望的に孤独な人々を生み出し続けているかに見取れる。そのような人々で構成される名ばかりの共同体——現今の資本主義のサブシステム——は、学校や職場等々の至る所で目視できる日が、さほど遠くないのではなからうか。その「新世界」では、金銭的思想信条をもって神の掟となすであろう。金銭的淘汰過程は、それに応じた人間性を継起的に再生産させてきたのであってみれば、この予見的筋道に対する反論は実質を持ち得ないであろう。文化は人間を

作りかえるのである。サブシステムはそこかしこで見事に機能することになろう。子が両親の遺伝子を受け継いで生まれてくるが如くである。結果だけを論^{あげつら}っても仕方がない。

第三章 資本主義の顔もしくは「顔なし」についての省察

稼働中の資本主義経済システムは、外観に若干の差はあれ一様に、機械制産業という巨大な物質的外枠をもつに至っている。そのシステムの規模の如何を問わず、どれもこれもまずはほぼ同型の生産体制のもつて、種々雑多な経済的諸力の相互作用を通じて、経済的利害の調整が図られる。この意味で、資本主義経済システムは、兎にも角にも規格化された所産であるかのように映ずる。

確かに、資本主義経済システムは相似形であるという意味で、同じ顔——抛って立つ精神——をもっているかに見て取れる。その相似形的システムは各人に同じ顔つきを迫るであろうし、また没個性的な人格——「顔なし」——を自らに課し、この形成に向かう者を次から次へと世に送り出してきた。こうして辿り着いた資本主義サブシステムとしての共同体的平面に立つて、各人はその持ち前の人間的資質を自ら探索することになろう。いわゆる、「自分探し」⁽⁹⁾がそれである。

だが、その平面で見出せる可能性のある個性とやらは、やはり金銭文化において輝きを増すものであることは想像に難くない。つまるところ、「顔なし」こそ資本主義経済システム——金銭獲得システム——で最も求められる人格となり、それなりの精気を没個性的外観に宿すこととなる。これまた金銭的社會化の効果である。

さて、恐らく誰しも聞き覚えがあろう。それは神の御言葉などではなく、生身の人間の声であった。それは多くの人々の耳にこびり付いて未だに離れないであろう。それは、人品卑しからぬ以上に、頭脳明晰この上ないと思われる新興の有閑紳士然とした人物の一声であった。

「金を儲けて、どこが悪いんですか！」

このやや苦し紛れの反問のなかにさえ、乾坤一擲の迫力が漂いもしたものだ。察するに、立派なその御仁は、金銭的精気を取り戻そうと必死だったのであろう。金儲けの是非が問われていたのではないことは、彼自身、先刻承知なのである。敬服に値する程のその金銭的明敏さは、何もかも承知の上であったことを自らをして語らむに十分であった。その意味で、「顔なし」を演ずることの精神的労苦、これに加えるに金銭的責任という重圧がもたらす苦痛とで構成される心的情況は、筆舌に尽くし難いものであつたらう。私なら決して耐えきれぬものではない。そこに身を置きたくもない。

こうした些か感情的雰囲気に囚われたかも知れない批判的論調は、誰よりも本稿を物している筆者自身に向けられるべきことを、ここに特記しておかねばならない。私自身とて、「顔なし」として席を埋める俗物なのである。ただ、このように自覚することによって、「顔なし」からの真の離脱を我が身の大きいなる希望とするに過ぎない。私には金銭的明敏さがまるで欠けてもいることも、この際、牢記しておかねばならない。しかし、これを恥ずべきだと私は思わない。

ここまでの雑駁な、自他に対する観相的推断が許されるとすると、個人主義とはまづもって、他に埋没しない主体的営為として理解できそうである。どのような角度から眺めたところで、「顔なし」には主体性の欠片かけらも見取れない。「顔なし」で構成される社会は、それ相応の浮薄な気風に満ちてくるであろう。金銭的営為に向けて最大限の努力が真つ先に傾注され、残余の精力がその営為の埒外に練り返し注がれるからである。したがって、「顔なし」による言動は、それが金銭的範囲外のものに向けられる際には、嫌々ながらなされるといふ印象を周囲に撒き散らす。この局面においては、「顔なし」にいつもの腰の軽さは見出せない。ぐずぐずしてやる気のない「顔なし」の姿勢は、伝染病のように伝わるようである。何を語っても「飛ばない石」¹⁰のような人間は、学生諸君のなかには見出し得ないことを祈るばかりである。

だが、「顔なし」本人は意外に頑固である。伏し目がちながら、自分に対する気遣い豊かに自分自身を取り巻く外界を気にする。他人の眼に映ずる自分を精一杯想像できたなら、必要なところで外部からの情報入力を遮断する。心地よい自分を見出したらそれで良いのである。あとは自己に耽溺することだけが彼の日常業務となる。自分自身が生氣に満ちた光を発しないので、その輪郭がはつきりしない。燐光のような、理解し難い灯りに包まれている。自分自身の内面を照らす光を持つことを躊躇ためらっているかのようにである。その躊躇ためらいが、「顔なし」の「顔なし」たる所以ゆえんなのだ。

ここまで俎上に載せられたとて、「顔なし」は、そのどつぶり浸かった彼らの思考習慣から容易に抜け出そうとはしない。むしろ、そこから進んで出ようとしなのが彼らの本性のようである。それゆえ、彼らの生活習慣はどうしても社会に身を晒そうとする営為の点で迫力を欠くものにならざるを得ない。事の流れからして、「顔

なし」が「自分探し」の旅とやらにもし出かけようと意気込むならば、その際に想像される光景は、どこことなく所在なさそうなものとなる。それは見方によっては薄気味悪く、滑稽なものにも映るであろう。「あちこち旅をしてまわっても、自分自身から逃れられるものではない」⁽¹⁾とヘミングウェイ (Ernest Miller Hemingway) は述べている。旅も逃避も、なかなか実を結ばないようである。

ともあれ、私的な利潤の獲得以外は、本来の「顔なし」が不向きとするところなのである。「顔なし」はヒト種に属する生物とは認定し難い。とはいえ、彼らにも個性の違いはある。獲得した利潤を浪費的に費消して見せたり、高利貸しを兼ねる変種も出現したことであつたれば、また随分と活躍したものである。はたまた、守銭奴にとどまり続ける祖先種も絶滅した訳ではなさそうである。それらの多彩な生活史を送る種とともに、時折「顔なし」に転ずる人々、および勤労の精神に満ち溢れたその他多数の人々との配合物が社会なのである。社会はそれらの配合具合によつて体をなし微妙な色合いの違いを見せるであろうが、次第に資本主義経済社会に移りて均一的な様相を呈するようになった。その意味で、人は皆、多かれ少なかれ、「顔なし」を友とすることが出来そうな流れに乗っている。資本主義は、金銭的社會化システムなのである。

子細に観察すると、資本主義システムないしは資本主義文化は、語られねばならない固有の性質を未だに含んでいるのかも知れない。それは、少なくとも、時代や国を異にすれば相応に異なるものなのである。歩んできた固有な歴史とそれがもたらす精神的堆積物や政治的な意見なり傾向は、同じ資本主義として一括するにはかなりの注釈を要するほどの類型の違いと内実の相違を、そのシステムに現出させている。「社会主義市場経済」などは、その好例であろう。なおまた、宗教的な葛藤とその受容の在り方、地理的ないしは地政学的条件、農業や

農村工業そして商業の勃興の時期や程度、技術革新と産業革命の態様、賃金労働者の実情と資本制社会への移行過程、家族の構成単位と編成の変遷、人々の総体的気質ないしは個人主義の成長の度合い、およびその他諸々の事柄は、相似形的な概観を備えつつも固有な資本主義システムを成り立たせていると見られる。

この資本主義という一定の文化の下で生活を営む人間は、アダム・スミス (Adam Smith) がその著『道徳情操論』 (*The Theory of Moral Sentiments*, 1759.) で語った有徳の人間に辿り着くべく、真摯な努力を重ね続ける者とは限らない。実態はその逆の傾きをもつであろう。むしろ、昨今その者たちは「同感の原理」の破片すら持ち合わせていないかに見て取れる。高度な知性と自己統制に基づく自己の認識——個人主義——をなしうる人々によって資本制社会への扉が開かれたのであったとしても、資本主義の文化は今や金銭を展開軸として生活過程が進展してゆくように再編成されており、営利企業の体制ないしは価格体制を現出させてしまった。この体制下では、金銭に対する「同感の原理」が各人の相互的牽制の状況を招いているかに見える。このような情況は、スミスの言句を敢えて転用するよりも、ヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel) の『精神現象学』 (*Phänomenologie des Geistes*) の特定の文脈を借用して説明する方が得策となろう。同時に、ヴェブレンの常套句も併用すべきであろう。その方が、うまく収まりがつくのである。ともあれ、「顔なし」で形成される共同体とは、およそ次のようなものであろう。

現今の資本主義経済社会は、自ら共同体精神の破壊作業中である。この社会という舞台では一応、人々は活気に満ちているかに見える。その理由は、現存の資本主義経済社会が、ホブズ (Thomas Hobbes) 的な闘争の場

になり果てているからである。だが、血生臭い武力闘争そのものが、この社会に活気を与えているのではない。何気ない日々の生活過程に染み込んだ「金銭的競争」として、その表向きの活気ある本性を現出しているのである。人々の一様に高く掲げた志は金銭獲得の実現であつて、同じ志をもつ他人との抗争に明け暮れる過程から抜け出すことはできない。この志を遂げようとする生活過程そのものが公共の秩序と称せられるものであるが、これこそ全社会的な反目の状態にほかならない。その志は成就したところで、そこで満足するようにはできていない。各人の同じ志が次々に同じ志の前走者を追隨して行き鬨ぎ合うせめという、その場限りの力の戯れを現出しているにすぎない。その力は、自己に対する否定の力となつていない。知性も乏しい。それゆえ、現存の資本主義経済社会は闘争の場であるにもかかわらず、一見、そこでは穏やかに時が推移してゆくかに見えるのである。⁽¹²⁾

見られるように、個人は、敷き詰められたピースのようにバラバラに散在しているのだ。その情況は、ローマ帝国を髣髴させる。しかし、我々をともかくも結びつけているものは、市民個々人の関係を規定する、例のローマ法ではない。現今の社会にモザイク的ながら座を占める我々は、資本主義がシステムとして内包する市場によつて、なんとか取り結ばれているのであろう。この市場の原理は、経済的立法の基礎とならう。そこで、道徳原理は不要となるか、休眠状態にあるものとして据え置かれる。それゆえ、市場の原理という基壇と経済的立法という列柱およびその他の金銭的構造材や部材とで建立される伽藍は、資本主義の顔と言われるべきものに成長するかも知れない。その内部では、いわば金銭による「聖化」を成し遂げようとするかの如く、一様な顔つきの人々が蠢うごいている。その意味で、彼らは、「顔なし」なのである。

第四章 資本主義社会とその最近の实情に関する点描

資本主義という稼働中の経済システムは、物事全般が価格によって不断に整序されつつある社会である。このことは、かつての封建社会が身分関係により整序された社会であったことと対比されるべきである。この対比は、金銭文化の段階と半平和的身分の段階との異同を良く示している。金銭文化段階にある資本主義社会では社会的実力についての評価が人間について回るが、これは半平和的身分の段階でも同じであつたであらう。だが、資本主義社会においては、必要な時には躊躇せず、価格によって迅速に、正確かつ遺漏なく行われねばならないことになっている。この社会の慣行では、人の信用とは金銭的な裏付けを要するとの準暗黙の了解事項がある。現今の資本主義社会では、従来からの身分関係は清算されたとされるが、それは未だ金銭的上下を律する大雑把な意識のなかに身を変じて居残つて居るようである。

この経済システムの有機体的代謝過程は価格によって表現された成果としての利益をめぐって進行するが、同じ経済システムが必要とする内面的生活過程は人と物とによる金銭的履行への習熟過程である。そしてまた、このシステム社会の日常業務——取引——としての必要事項は、複雑多岐にわたる契約とその履行である。これによって発生する法的効力は、多分に金銭的な遣り取りとその裁定に向けられるものとなる。この意味で、資本主義システムは金銭的利害関係を調停する契約の王国を建設したかの如くに見える。私有財産制度は、そのシステムの根底で作動しており、王国の要石となつて居る。こうした金銭的契約の王国から人倫的精神——良心——が純粹な形式を備えて出てくるとは思えないが、契約上の利害関係者は「御恩と奉公」——日本の歴史に現出した

主従関係——に見られたような献身的様式を、金銭的主従関係のなかに持ち込んだかのようなのである。そこには、何かしら新しい資本主義的「良心」が見出されるべきなのかも知れない。しかし、そのような「良心」は、金銭的圧力に抗する術をもたないであろう。

資本主義の社会は、お金に無頓着な人々に対してでさえ、金銭的規準に従わせ突き動かす力を厳然としてもっている。この力は、諸個人による生活経験とその蓄積を通じて社会的構成力としてあらゆる生活局面に内面化されていくと見られることから、これを「金銭的潜勢力」と称して良いであろう。この不可視的な力は、市場価格と取引数量の決定に向けて働く市場機構の諸力そのものとして現象する力ではない。それは、資本主義が本質的にもっている内面的力なのである。「金銭的潜勢力」は非金銭的基質の分解反応から金銭的営為の基となるエネルギーを合成する、いわば「異化作用」(catabolism)を引き起こすものとして考えて良いであろう。

経済社会に広く行き渡った「金銭的潜勢力」は、現在までのところ、この経済社会に外形的枠組みと内面的秩序とを与えている。「金銭的潜勢力」は市場機構の守備範囲を遙かに超えて、学術、芸術、宗教等々がそれぞれ有する固有の価値領域に放散する。このことは、「金銭的潜勢力」が人間の意識、意欲、感情、構想力および創造力等々の在り方に少なからず影響を与えることを示している。こうして、人間の知的活動の分野にも、金銭的規準が事も無げに適応される事例が頻出することになる。今や、金銭的利益の得失という規準は、社会と個人それぞれその経済生活の全局面において、最高位に戴くべきものとして実質をもつに至ったとさえ見える。この規準以外のものは、時として、どうしても良いかのように取り扱われかねないのである。

そこで、個人に始まり国家に至るまでの各経済主体は、ともども「金銭的潜勢力」の実現に向かうこととなる。

ここで問われることになるのは金銭的稼働能力である。どのような個人であっても、その能力の行使は経済活動の活況に一役買うものと見なされる。したがって、個人に留まらず国家を包み込んだ金銭的稼働能力の大量発動は、外形的には資本主義システムの盛行を示すことになろう。このようにして、金銭的理路が制度として定着する。金銭的生活者自身の思考習慣は割り切った (practical-minded) ものという意味で整然としたものになる。

彼らは、無論この私自身も、ともども思考と行動の習慣には金銭的規準が幅を効かせることとなり、その分だけ道徳的規準は後退するか停止状態に陥るであろう。もはや、道徳的懸念は金銭獲得の営みから完膚無きまでに払拭されたと見られるし、そのことがまた獲得された金銭的榮譽を道徳的共通善に押し上げてしまったかのように見て取れる。言うなれば、ある種の「宗教改革」が生起したのであろう。それは資本主義の整然とした金銭的理路のうえに成長したものと見られ、同時に、刻々と編成を繰り返す市場の諸力が折り重なることによつて、それと知られずに進行してきたとみられる。こうした新しい「宗教改革」に対する見方は、甚だ迂闊とばかりは言えないであろう。ことに、宗教といえども金銭文化の影響を受けると付記しておけば、ある種の非難から免れることができよう。宗教に対する金銭的社会化が進行していたことだけは、確かである。

いずれにしても、我々が手にすることになった生活体系は、資本主義という極めて洗練された金銭的価値の生産と消費のシステムである。そのシステムが順調な時の効率性、迅速性、網羅性および円滑であることは、実験された限りの社会主義とは比較すべくもないほど優れている。現今の資本主義システムには、計画では成し難いと思われる各種各規模の市場、それに見合った大規模機械制産業体制、および制度——金銭的思考習慣——が付き従っているのである。これらはいずれも、もうこれ以上はないと思われるほど成長したかに見える。こうして、

日々の生活が抛つて立つ金銭的生活体系が完成した限りは、人はこの枠組みのなかで金銭的生活習慣に慣れ親しむことになる。もはや、金銭的意識に辿り着いた以上は後戻りはできないようである。この局面では、そしてこの最前線になればなるほど、高い知性の登場が個々人の意識において待たれるのである。

資本主義の経済システムにおいては、人間と社会の価値はともども、既に到達している富の水準やその金銭獲得能力の多寡、およびそれらの伸長可能性と実現の度合いによつて計られもする。確かに我々は、そのような文化的情况に晒されているのである。物事と人間は価格による価値評価過程に放り込まれている、と言えるであろう。そのような無機的生命過程が資本主義経済システムである。ここでは、次世代を担う貴重な人間が教育過程を通じて再生産される。人間の金銭文化への習熟が図られ、資本主義がシステム障害を起こさない程度の個性豊かな人間が、教育過程から継起的に輩出されてきた。今後も、まずはそのような経過を辿るのである。

再言するが、我々の意識は金銭文化に到達して久しいのである。それに見合つた共同体そのものが実現される契機を意識は手に入れたのであり、それは自由な翼を広げることが可能なのである。但し、前進する力を失えば揚力もまた然り。墜落するであろう。前進する力とは金銭獲得の営為のことではない。知性のことである。

学校教育の過程において任意の者の学力的位置を示す値——学力偏差値——が有用であるように、それは継ぎ穂されて「金銭的教育評価基準（“pecuniary standard of educational evaluation”）」として場を見出し、現れた金銭的思考習慣の片隅で人間的評価を下支えしているように見て取れる。学力偏差値にしろ「金銭的教育評価基準」にしろ、平均値からの隔たりや経済的動産としての人間の曖昧な可能性を示しうるものに過ぎない。特に比

較的素朴と思われる学力偏差値の数学的意味に想到するならば、それは各人が自分の努力目標を良く知るについて資するところ大となり、また当面の希望が成就しうるか否かの可能性をそこから探ることもできよう。その限りで学力偏差値は誠に有用であり、使用目的にとつて打つて付けのものとなりうるのである。

確かに、刻苦勉勵の成果や不首尾が、学力偏差値によつて推定できるものと期待されている。時としてその値は、本人はおろか、家族そして親族までも落胆ないしは失望に向かわせる。その逆の事例にも事欠かないのが実情である。周囲の者のそうした反応は人間的なものであり、家庭内に意見の不一致や無用の不和ないしは激情を生むこともあれば、本人のやる気を闇雲に増幅させる幸運な事例もあげられるであろう。周囲の声が、正否いずれに対するものであつても、本人の人格に向けられるべきでないことは確かである。学力偏差値が示す範囲の事柄には、さほどの知的な意味など無いのかも知れない。少なくともそれは、知的な意味合いにおいて、自己を相対しうる実質的範囲を決められるものではない。

ともあれ、実質的な相対化の作業は、当の本人によつて否応なく開始されるという次第なのである。提示された数値の向こう側に、未だ見ぬ複数の競争相手が浮上する。彼らの出来不出来が相対化を推進する当該本人の念頭の上つてくるはずである。約言すれば、自分と他人との関係を、特定の数値によつて彼は知るところとなるのである。だが、その場合の相対化は豊かな人間的接触に基づくものではない。自分を相対化できると言つても、たかだか、それは各種試験等々の想定される成功率によつて振り分けられた位置づけを、機械的つまりは非人間的な「想像上の対人接触」により認識することなのである。そのことに各人が精一杯であるとなれば、具体的な展望なり希望を自ら見出し、これを将来に向かつて成長させていくことは至難の業となる。座標変換——数学的

実体としてのベクトルそのものには変化をもたらさない——は試みられるかも知れないが、それは「見てくれ」を変えてくれるだけである。学力偏差値による自己の相対化は、どう見ても知的な営みとは言えない。

学力偏差値が示しうるものは多様な人間性のうちの一面であるにもかかわらず、成長しつつある金銭的文化的の下では、その制度的環境に見合った取り扱いなり評価がなされる。金銭的文化的は学力偏差値をして、価格と同等のものとなす流れに引き摺り込もうと待ち構えているのかも知れない。それだけに、株価指数を眺める際の習慣は教育現場では停止状態におかれねばならない。教育再生の論議にしても、市況解説の如きものに成り果ててはいないことを祈るばかりである。もつとも、この祈りが届くか否かにかかわらず、学力偏差値にしる「金銭的教育評価基準」にしる、何ものにも代え難い拠って立つ教育上の指針、さらには人生上の指針として今後も廃れることはないであろう。むしろ、それらがさらに成長するには、さほどの障害はないかのようすら見える。だが、あらゆる人間が有する多様な能力が学力偏差値の利便性によって価値なきものとして削除されることは、当事者そして社会にとつて不幸である。そのような教育の過程——家庭において始まり、生涯を通じて継続する——が任意の学校に任せられるのであれば、多少不揃いではあるが特定委託加工品として人間は世に出ることになってしまう。このことは、誰でも厭うはずである。教育の虚飾的効果は、金がかかっていることのうちに見出されはならない。

ともあれ、如上の教育的現況の一端を含むのが、昨今の日本である。日本の社会においては、物言う「委託加工品」たちは浪費に関して無頓着であるように慣化されているためなのか、現在の生活水準から容易には撤退しない決意を、彼らは無意識のうちに固めたかに見える。生産と消費はどこまでも拡大していくであろう、という

先入観は生き残っている。よって当面、この先入観は力を失うようには出来ていない。技術革新は今のところ、資本主義社会を支えることを通じて、この先入観にむしろ実質を与えているようにすら見える。この意味で彼らとともに我々も、この社会の「金銭的潜勢力」の幻惑的な一面に「埋没」しているのかも知れない。確かに、埋没的金儲けの一心不乱の励行によって諸々の成功が得られもし、これが世の習いだとして語られ、人生訓の一定部分をなすまでに成長しているようである。「好きこそ物の上手なれ」とは良く言ったものである。

この種の各事例を語るについては、「埋没」だけではなく、「没頭」という能動的な意味を含むであろう語もまた適宜用いられるべきである。「禁欲的な」という形容動詞あるいは名詞的形容詞が「没頭」という語に結びつけられるならば、それは労働者のエートスを指示することに用いられる。それは資本主義の精神に高尚な印象を与えてきた。「禁欲的没頭」には積極的の意味が込められているのである。この場合、「禁欲的埋没」では、決まりが悪いように思われる。

だが、ここでの文脈においては、差し当たり「埋没」なる語を単独で用いても大過ないであろう。確かに、現実を目をやると、金銭獲得への「埋没」を自己実現欲求の達成過程と決め込み、唯我独尊の無頓着を励行している輩も珍しくはない。その者たちは、人間生活の多様な局面において暗愚であることを装うことに吝かではな^{やぶさ}い。まずは上々の経済生活が営めるのであつてみれば、勢い、「顔なし」が勢力をもち蔓延^{はびこ}る。この場合の「顔なし」は、その無表情さ、それが昂進した場合には精気の無さと暗愚さとして我々の眼に映りもしようが、金儲けのための金儲けへの「埋没」振りを本質的に示すことだろう。もとより私自身を含めて、暗愚な人間が大量生産されているのが現今の状況と思われる。その責を委託加工的な教育にだけ負わせても解決にはならない。

まずは、金銭的欲望充足システムとしての資本主義が含む一定の欠陥を是正しなければならぬ。あるいは、システム変更を余儀なくされるかも知れない。だがこの完璧な正は、恐らく、人間の知性的復興というような壮大な全社会的運動を巻き込む大事業になるかも知れない。そこでまずは、平和的精神に基づいて足下から、これに着手しなければならぬであろう。極端は破滅への道を往々にして用意するからである。差し当たり、持続可能な共同体社会建設のための学際的研究を徹底のかつ真摯に行い、もって浪費の再生産からの脱却の方途を具体的に図らねばならない。これも、中々に難題である。現今の資本主義は事も無げに浪費に基づいているからである。だが、この浪費からの脱却が例えば軍事支出からの解放を伴いながら地球上に漏れることなく実現されたならば、その幸いは何ものにも代え難い程のものとなる。そこには恒久的平和が確立されていることだろう。あらゆる意味で、戦争ほどの浪費はないのである。だが、どこから、夢物語を吹聴することなかれ、との冷淡な非難が発せられるのが落ちである。これが現状である。

浪費からの脱却を図りつつも、教育と医療および知性的活動領域全般への国家予算の投入は、必要に応じて遅滞無く果断に行われねばならない。それは、過剰生産を回避しつつ共同体社会建設のための投資となりうるが、まずは心身ともに健全かつ健康な人々を生み出すことに資する。投資の果実は恒久的平和の実現である。このうえで、浪費なき再生産の理論、さらには縮小再生産の理論が模索されねばならないが、今のところどちらも見込みはない。特に後者は「愚公山を移す」が如き難事であることはおろか、罪悪とすら思われている節がある。つまりその難事は、初歩的な経済学すら知らぬことに起因する計画案とされるのであり、これまた夢物語として迅速に処理されてしまうのである。どうやら、物質的富の拡大再生産と幸福とを自明の因果関係にあるものとして

機械的に結びつける強固な先入観が、未だ健全さを誇っているかに見える。だが、どのような経済理論であつても一定の人間性の仮定に基づいて建設されていることを、知らぬまま済まされてはならない。非知性的および快樂主義的先入観を改めるには、なお相當な時間と精神的エネルギーとを要すると思われる。地道ながら、個人の主体的生活において教養の経験を繼續しうるか否かに、すべてはかかつているように見える。

日本社会の現状を見渡してみた限りでは、「教養の経験」は不足の一途を辿つていられると思われる。その営みは、知性に基づいていなければならないが、これも欠乏しているようである。たとえば、大恐慌のような経済的破局に打ちのめされた身であつたとしても、あるいはバブル経済に痛手を被つた者にしても、資本主義の経済システムの何たるかについては、もはや考えを巡らさなくて済むようになっていられる。このことは、積み上げられた「教養の経験」を無にすることである。また、過酷な貧困や南北問題は緊急の懸案事項であるとする装いの下、この国の経済システムそのものは深刻な経済的打撃を受ける予定はなく、また受けたとしても立ち直りうるとする無邪気な確信が、各人の心のなかで成長しているのかも知れない。この心構えは知性的とは言えない。なおまた、ニユートン主義的先入観は経済学者の専売特許ではないとも見える。経済問題は機動的な経済政策の策定と実行——往々にして時宜を得たものではない事例が見受けられた——で緩和されるか解決に向かうと期待される。およそ経済問題は資本主義経済社会に固有の現象ではない、という同情的ないしは好意的に過ぎる意見が生まれもしたことだろう。その流れからして、資本主義の経済生活に関する人々の思考習慣は、無反省な方面に成長することとなる。それは制度として既に受け入れられて久しく、我々の考え方と行動に定着している。

そこでこの際、そもそも資本主義の何たるかを説明することが一定の意義をもってくる。誰でもが知っている言い回しによれば、資本主義は生産手段を持つ「資本家」に雇われた多数の「賃金労働者」によって利潤の追求がなされるシステム、という耳慣れた説明に落ち着くであろう。したがって、資本主義は社会関係が体现された経済システムであるとも言える。この場合に、「資本家」や「賃金労働者」という言辞は、それらが象徴的意味を發揮する範囲で用いられるについては、確然とした学理に適っている。しかしながら、それらはどことなく古めかしいイデオロギー的臭気を払拭しきれいなと思われる。それゆえ、「資本家」や「賃金労働者」という言辞は、慎重に用いなければならない。

まずもって、今日では不在所有者としての資本家の存在を見過ごすことはできないのである。むしろ、近代企業を支配しているのは不在所有者である。彼らの意思の取りまとめ役もまた、多かれ少なかれ不在所有者権を行使する。この場合の不在所有者は最高経営権を意味する。この最高経営権を有する責任者は、生産現場に直接かつ恒常的に携わることにはまずないであろう。けれども、ある種の要請——当該企業の株価への信頼を強引に引き出すこと——が急務となった時、初めて儀礼的なパフォーマンスとして「生産活動」の現場にその身を現すかも知れない。そして、鷹揚かつ親しげに振る舞うものだが、返って投資家の不信を招くこともある。過ぎたるは及ばざるが如し。

また、同様の実質的效果を期待して策定されたと思われる急場凌ぎの善後策が、昨今確認された。ほぼ誰でもが知っている菓子——ラング・ド・シャ (Langue de chat) のクッキーでチョコレートを挟んだ菓子が、代表的な観光土産として有名——を製造する菓子メーカーの代表取締役社長が、「生産活動」の数日間の停止を北の大地

にて自主的に宣言した後、引責辞任することになった。その代表取締役は、自ら主要株主であり、他の主要な株主を統括する不在所有者にして社長であった。当初、一件の事情を良く知っているものとされたのは、非不在所有者であろうと目される一従業員の課長ないしは部長であった。その限りで、責任の所在は真つ先に、そして全面的に彼らのものとなるかに見え、その方向に向かつて急場を凌ぐようなお決まりの会見が執り行われた。そのような一連の事の流れを取り繕うことまでもが、彼らの準日常的「業務」に成り果てていると見えもした。殊勝にも、彼らはここでもその「業務」——擦りつけられたであろう責任を全うすること——を見事に執行し得たのである。ともあれ、責任は彼らとて、やはり逃れられないのであった。「生産活動」の全行程と出荷先および賞味期限に通曉した叩き上げの者ならば、自らそう感じたであろう。かつまた、最も良心が痛みもしたであろう。それゆえ、その光景はまったくの部外者にさえ痛々しく感じられもした。

ともあれ、表向きの反省の弁を型通りに反復する様子は、半ば慣れ親しんだお決まりの光景であつたし、今後もしばしば見て取れるであろう類のものであつた。だが今までのところ、起こした事の重大さに対する責任の一途な自覚、衷心からの謝罪の弁、厳格な調査と関係者に対する処分の迅速な断行、および再発防止への取り組みすべてに「真摯な熱意」を発揮したかに見える会見なり表明に遭遇することはなかつたのではなからうか。これに替わつて、会社の建て直しに関する意気込みは、それこそ相当な熱意あるものとして印象深かつた。その際、脳裏に去来したのは、保身という言葉である。その本体は、「善意の錯覚」ないしは「無邪気な見込み違い」を主因として出来上がっているものと、祈らずにはいられなかつた。それでもなおかつ、反省の弁は上辺だけのものとなり良心までもが保身の前に屈することにならう。ともあれ、復活の日は、ことのほか近いものと推察でき

る。こちらのほうは、祈らずとも成就するであろう。つらつら思うに、「正直な取引の評判」⁽¹³⁾ という無形資産の価値は、今般の事例においては結局のところ、特定の人気商品の収益力の前に屈したということになる。良心と正直はともども、骨抜きになるのであろう。

一般的事例からすると、この種の会見なり表明の理想型は、まずは滅多にお目にかかれるものではない。むしろ、通常の形態からすると、その光景は政治家の逃げ口上に似て、痛ましいほど惨めに映るものとなる。拙劣なマニュアルの棒読みによる型通りの反省の弁なら事欠かないのである。当事者ならずとも、「何も意味などありはしない」⁽¹⁴⁾ と胸中に反芻したい気持ちに駆られる。だが彼らは、バーナムの森 (Barnam Wood) がダンシネイン (Dunsinane) に押し出してこようが、⁽¹⁵⁾ 心を微動だにしないと見える。

「真摯な熱意」というならば、一見してそれらしいものは経済生活の別局面において、比較的最近の事例として良く観察された。その光景は躍動的な企業再編——各省庁・銀行幹部の立案ないしは斡旋と指導という因習的体制から資本・株価の論理への今更ながらの変化——という経済事案と思われたし、その後の良く知られた経過とも相俟って、我々の記憶に定着している。かつてその折り、何やら、「シナジー効果」(synergy effect)——複数の企業ないしは事業の個別の経営資源の共有化を通じて、企業価値あるいは株価に対するプラスの効果を期待すること——がどうのこうのと、「真摯な熱意」をもって語られたのであった。斯かる時の人——不在所有者——は、これまた「真摯な熱意」とパフォーマンスとで名の知れた政治家の、弟分になったり息子になったりしたようである。けれども、今はどうなったのやら不明である。どうやら民法上の親子関係等は端から存在しなかったようである。それゆえ、事の流れからして、ますますもって「兄」や「父」の存在は稀薄にならざるを得な

いであろうが、かつての時の人御自身は健在であるようだ。これは幸いである。空想的血縁関係を突発的かつ半強制的に、あるいは事のついでか行き掛かり上迫られた感のある彼には他企業の従業員として活躍の場が開かれていたし、そうしようと思えば賃金を取得できたのである。今後とも、その可能性は開かれている。

可能性というならば、普通の賃金労働者にも別方向に方途は開かれている。すなわち、賃金労働者から出発した者であっても、自己資本の慎重かつ熱心な投下によって利潤を獲得することができるのである。この場合、自己資本の多寡は事柄の本質に関わりがない。彼は「賃金労働者」であり「資本家」なのである。法律によって定められた「労働者」の権利とともに、彼は「不在所有者」の強制力のある権利を多少なりとも行使できるのである。加えるに恐らくは、無形的な名誉も彼は手中に収めることができるのである。なお、この場合の「労働者」は、より慣れ親しんだ言い方では「サラリーマン」である。

これと同じ内容の経済的諸権利を有する「サラリーマン」としての人格者は、スポーツ選手のなかにも存在する。その不在所有者にしてスポーツ選手である「サラリーマン」は、長年の努力と類い希な天性等々が見事に調和したものと外見上見て取れる。ことに伝統的な国技の名誉ある地位を遺漏無く勤め上げていると見られた横綱——技量はもとより、礼節を辨え、わきま厳肅な趣に満ち、高潔な人格を保つことに重心が置かれるべき最高峰の地位——は、その母国で不在所有者になることもできてしまった訳である。その多方面に渡る経済活動が上手く執り行われるならば、企業グループの総帥として同胞——家族親族を第一に含むであろう——の雇用の拡大に寄与することは疑いがない。異国における名誉このうえない横綱という地位に加えるに本国での金銭的成功は、新興の有閑階級としては、お墨付きの有資格者となる。その言動は——無言を決め込んだとしても——政治的な趣を

もつであろう。それゆえ、利害関係者の間には無用の蟠わたかまりが生まれるであろうし、それは事情に精通しない普通の人々にまで拡散していく可能性がある。結局、既に公になっていた決定事項を覆すための理事会が、緊急に——とてもそうは思えない——招集された。その場で理事から辞表が提出されたという形跡は、確認できない。ついでに言うならば、大相撲のその横綱には約一億円を優に超える申告漏れが指摘されていた、と報道各社が伝えるところとなった。追徴税額は過少申告加算税を含め約三千万円とみられ、既に修正申告済みという。この点は素早い行動が奏功したと見える。もちろん、「解離性障害」——骨折などは話にも上らない——との権威ある診断が横綱に下される遙か以前に、金銭的一悶着は片付いていた訳である。金銭的に急を要する事情は誰しもあろう。スポーツ選手も普通の人も、その点では変わるところはない。ただ、スポーツ選手——あまり一般化してはいけないかも知れない——の方が、やけに骨折に対する耐性が優れているようだ。痛みも、さほど感じないらしい。我慢しているとの反論があるならば、それこそ耐性が優れていることの証拠となる。医学的見地からして時を遅えて撮影されていなければならぬ複数枚のレントゲン写真が、その証拠を必ずや後押しするであろう。臨時の横綱審議委員会では多分、そのことも審議されたのであろうが、調和的な帰結に達したようだ。その後の経過は、これを知る由もない。⁽¹⁶⁾ もはや、知りたいとも思わない。

ともあれ、「資本家」および「賃金労働者」の現行の意味合いは、それら本来の古典的厳密性によってのみ捉えられるものではなくってきた。それらの間への線引きは、これを任意の普通の個人に対して行おうとする場合でさえ、容易ではなくなってきたのである。そのうえ、そのような個人が大量現象として現れているかに見え

るのが、昨今の資本主義社会の様相である。その個人は「技術者」としての資質を、「資本家」や「賃金労働者」のそれにも増して備えているかも知れない。したがって、既述のような資本主義の耳慣れた規定は、些か形式的で曖昧に過ぎると言わねばならない。

では、繰り返し自問することになるが、いったい資本主義とは何か。その具体像に接近しようとするならば、あげられるべき本質的な構成要素は何であろうか。

まずもって私有財産制度は、これを資本主義の本質的要素から外すことができない。いわば資本主義の揺籃の地たる私有財産制度のうえに、資本家や労働者に自由な経済活動の場が与えられ、市場は自生的に形成されるようになった。歴史的に見れば、既に形成させていた市場が資本主義経済に組み込まれていったと見る方が正しいのであろう。確かに今日では、資本主義の諸社会では、各種の市場——生産物市場、労働市場、資本市場——が形成されている。⁽¹⁷⁾ それらの市場においては競争が見られ、需給の調整が図られ、価格が決定される。雇用も市場を通じてなされ、生産活動は主に私企業によってなされる。私企業の存立には、制度化された経営についての専門的な技術や知識が不可欠である。「経営の才」ないしは「経営の感覚」——日本では江戸時代に芽生えたいらしい——も自生していることが望ましく、またそれらは成長していなければならない。また、契約に関する觀念が理解され、履行される制度が定着していなければならないであろう。

ここに述べた私有財産制度、私企業による生産活動、形成された市場を通じての需要・供給および価格の調整、おなじく雇用と労働の調整などは、資本主義経済を語るうえで構成要素としていずれも除外することはできないであろう。だが、これらのなかでの本質的要素は、私有財産制度に求められる。これなくしては利潤の帰属が

不明となり、経済活動はその動機の点から空中分解するであろう。それゆえ、「私有財産の否定」ほど、資本主義的熱狂——金儲けのための金儲け——に対する有効な解毒剤になりうるものはない。

なお、利潤の動機は「経営の感覚」を研ぎ澄ましたものにするであろう。それゆえ、自他いずれに対する評価であろうと、利潤に対する貢献という観点から推し進められる傾きが強くなる。このことは個別性をもった人間の評価に向かう際に同じ数量的平面から接近しうる道を確認としたものにしたであろうし、評価される各人はその同じ平面において自己を相対化する感性を磨くことになったのかも知れない。そのことが、金銭獲得の動因として要求される個人主義を大量現象として現出させたか否かは不明であるが、我が国のみならず西欧においても、個人主義はことのほか早期に経済的事情のもとに産声をあげたと推察できる。個人主義の成長も、資本主義の成立には深くかかわっているであろう。現われ出た資本主義もまた、個人主義の助長に力を貸すと見られる。その度が過ぎれば個人主義が盛行し、それは利己主義と混濁することになろう。

こうして見てくると、資本主義と一口に言うけれども、その概念を機械的な立場から規定するだけでも中々に困難である。進んで、多様性を含んだ文化的現象として資本主義に接近するとすると、その精確な概念規定はいっそう困難となる。マックス・ヴェーバー (Karl Emil Maximilian Weber) による宗教と社会に関する比較社会学的研究¹⁸⁾やヴェルナー・ゾンバルト (Werner Sombart) による奢侈とその精神の発達についての研究など¹⁹⁾が、まず待ち構えている。これらの傑出した労作に肩を並べるリュ・ブレンターノ (Lujo Brentano) の諸著作²⁰⁾も興味深い。リチャード・トーニー (Richard H. Tawney) の名著も、その異なる主張を含む各版にわたって必読と言わねばならない。²¹⁾

資本主義の生活過程とその変遷は多岐に渡り、個々に異なる側面を含みつつ複雑な様相を呈する。それゆえ、この全体を本格的に研究するとなると、浅学の身にとつてはいよいよもつて手に負えない難事を背負い込むことになる。それゆえこの際は、かかる難事に立ち向つた権威者たちの手になる業績の数々を繙く^{ひもと}ことが得策である。それらの研究業績のうち、資本主義の起源や資本主義と倫理との関係に限定したもののだけでも、極めて多くを数える。それらのうちのいくつかの卓絶した業績は右に掲げた通りであるが、到底、それは網羅的な書目と言えるものではない。だが、まずは限定的な研究業績の教えるところによつて、我々はもう少し資本主義の概容に接近できるであらう。

資本主義がシステムとして、それらしい性質と機能を整え力強く稼働し始めた時期は、人類史の観点から見れば比較的最近のことである。それゆえ、ともすると、それ以降の資本主義の発展過程に直ぐさま飛びついて、そのシステム論的な考察のみで良しとする研究の在り方も出てこよう。だが、経済史研究の立場からすると、我々の視程はさらに過去に遡つた時点に据えられねばならないようである。歴史は累積的に変化してきたのであつてみれば、特定の経済事象についての論究が歴史的になされることに、相応の意義を認めねばならない。

良く知られているように、資本主義の精神としての営利主義すなわち金銭への飽くなき欲求は、古典古代および中世の商業高利貸し資本に見出せるのである。それらは他の文化を構成する諸要素とともに相携えて歴史を歩み、資本主義という一定のシステムに結実したと見られる。その時点は、一八世紀後半の西ヨーロッパというところにならう。だが、その資本主義の制度的基礎を私有財産制度に求めるのであれば、我々はここでの議論の出発

点を過去のどの時点に求めうるか、当面の間は未定のまま据え置かざるを得ない。この点で、歴史学を専攻する学生諸君の知的好奇心は、資本主義の概念規定それ自身よりも、その発生や来歴に惹き付けられるのではなからうか。ともかくも、資本主義は一定の歴史を持つていたのである。資本主義をその下支えとなる私有財産制度から歴史的に説き起こすとすると、極めて包括的な知見を要するという意味で、かなり困難な課題となる。それは本稿での守備範囲と私自身の能力とを遙かに超えている。

世界史の枠組みで見ると、資本主義がいつどのように発生したかを考える際には、イギリスの産業革命は言うに及ばず、それに先立つ商業革命としての重商主義の経済活動に視野を広げるべきである。我が国においては、明治維新以降の経済生活のみならず、少なくとも江戸時代全般の経済生活を視程に置いて、資本主義とその生成とを議論しなければならないであろう。いわば重農主義の時代にあつた江戸時代に、資本主義的胎動は生じていたと見られる。資本主義の成立に必要な「経営の感覚」は、江戸時代の農民たちによつて、その日常業務——農業——から酌み取られた面が考慮されねばならないであろう。江戸時代は実に興味深い時代なのである。

さらに、資本主義の発生の筋道を辿るべく営利的精神に着目するならば遙かに視程は宗教改革を通り越し、その根源を追い求めて古代文明——世界四大文明——に行き着くかも知れない。また、日本列島の各所で発見された各種の遺物と遺構に、その営利的精神の発端になりうる要素が付着するものと見る、几帳面な研究者が現れるかも知れない。しかし、貨幣経済に到達していない生活過程においては、洗練された営利的精神などは、そもそも見出しようがない。そこでの文化的慣行は、非営利的方面に優勢を誇つていたのである。

この弧状列島においては、弥生時代はもとより縄文時代の生活痕跡からも、経済生活の豊かさの多様性が見出

せる。たとえば、縄文中期には、一定の技術的成長に裏打ちされた経済活動の明らかかな生活痕跡が確認できる。東京都北区上中里の中里貝塚がその事例である。⁽²²⁾そこでは、生産、交換、消費の在り方、富や所有の観念、および交易とその範囲等々が考察の対象となりうる。これらの諸条件を備えていたであろう縄文中期の社会は、營利主義的精神を生み出し成長させてゆく文化的環境にはなかつたのか、また貨幣抜ききの経済運営は物々交換と贈与が可能にしたのかどうか等々、学問的興味が尽きない。

ここまでの論議において私は、資本主義とは何かについて考える糸口を、自分なりに模索してきた。本稿の目的に到達するについて一定の問い掛けが繰り返しなされたのは、卑近な実例を多様した関係で論議の筋道が複雑化したため、焦点が曖昧になったと思われたくなかつたからである。むしろ、次に探究すべき問題の所在は既に明確となった。かなり錯綜した論議の筋道の帰結として、それはようやく明らかとなったのである。それは言うまでもなく、所有権制度の起源を辿ることである。資本主義とは何かについて考える糸口は、所有権制度の起源を辿ることなしには、決してなし得ないと思われる。しかしながら、この研究は今後に俟たねばならない。

平成十九年九月二日

(1) 拙稿「帝京大学学生のための『日本経済史』入門講座——第一回 ソースタイン・ヴェブレンとその発展段階——」「帝京史学」帝京大学文学部史学科紀要、第二一号、平成十八年二月刊、三二五〜三五七頁

ージ。

(2) 拙稿「帝京大学学生のための『日本経済史』入門講座——第二回 ソースティン・ヴェブレンと文化の進化——」「帝京史学」帝京大学文学部史学科紀要、第二二号、平成十九年二月刊、二五九〜三八一ページ。

(3) 論考は、帝京大学文学部史学科紀要「帝京史学」への掲載が危ぶまれた。けれども、同学科編集委員の諸先生方から格別の御配慮を賜り、程なく、その掲載をお許しいただくことができた。それゆえ、私はこの場をかりて、衷心より謝意を表する次第である。

(4) そうこうしているうちに、平成十九年度の前期講義が終わり、続いて前期試験が実施された。その採点を完了すると同時に成績報告書を作成し、これを提出した。折から異常に暑い日が続いた。私は昭和三十年代の最後の年——オリンピック東京大会が開催された——を小学校三年生として過ごした。西暦で示すならば一九六四年である。その年の夏、八月の平均気温は摂氏三十一度に僅かに満たなかったと記憶している。最高気温も、昨今の猛暑ほどには上昇をみなかったと遠い記憶に刻んでいる。さりとて、若かりし頃の肉体にとつても暑い夏には違いなかった。以来、四十三年が経過したのが今夏である。その間絶えることなく、温暖化は進行していたのであった。

さても遂に、七四年ぶりに最高気温が更新された。岐阜県多治見市と埼玉県熊谷市で国内観測史上最高の摂氏四〇・九度が観測されたのである。いったいこの先どうなるのかと思われた頃、論考の執筆に着手していないことに気づいた。にわか気象予報官になることは、その時点で断念した。

(5) ここで、帝京大学の建学の精神を掲げておこう。

努力をすべての基とし偏見を排し

幅広い知識を身につけ

国際的視野に立って判断ができ

実学を通して創造力および人間味豊かな

専門性ある人材の養成を目的とする

(6) 次の論説を参照のこと。——青山貞一著、「論点」、讀賣新聞朝刊、平成十六年一月二十六日号。

(7) 『聖クルアーン』「第二十五章 識別章（アル・フルカーン）第六十七節」、日本ムスリム協会発行、平成十六年刊、四四三ページ。

The Qur'an (New York: Oxford University Press, 2004), p. 230.

(8) ジョン・デューイ (John Dewey) は、「人間と文化との相互作用を正しく認識している。デューイは、その著『自由と文化』(*Freedom and Culture*) のなかで、次のように述べている。

「人間の本来の構成要素がなんであろうと、ある時代と集団の文化は、それらの諸要素の取り合わせにおける決定的な影響力をもつ。すなわち、文化は、家族、氏族、民族、宗派、派閥および階級という、あらゆる集団の諸活動を作り上げる行動の型を決定するものである。文化の状態が「人間の」本来的諸傾向の序列と配列とを決定するということは、少なくとも、人間性がそれ自身の満足を得ることのために、社会的諸現象についてのあらゆる特定の趨勢ないしは体制を作り出すことと同様に真実である。問題は、文化の諸要素がお互いに相互作用するその様式を見出すことであり、また人間の諸要素が、現存している環境とそれ

らの相互作用によって設定された諸条件のもとで、互いに相互作用を引き起こされるその様式を見出すことである。」John Dewey, *Freedom and Culture* (New York: G. P. Putnam's Sons, 1979), p. 18. [明石紀雄訳『ジョン・デューイ』研究社、昭和五十年刊、一二六～一二七ページ]。

(9) 昨今、「自分探し」なる語句を耳にする機会が少なくない。これを実行するかの姿勢の下に、その語句が自分の口をついて出たことはまだない。けれども、世上、この語句が楚々として歌い上げる「自分探し」の踐行に努力を惜しまぬ者は、また少なくないのであろう。「自分探し」は常套句の地位を得そうな勢いなのである。

誰しも、自分がこれと思い込んだ方面への永続的な関心は、これを断ち切ることはかなり困難である。まして、その関心が人の内面を突き動かした以上は、その「自分探し」の努力に他人から水を差されたり、その当否についてとやかく言われることは癪に障るものである。そうした心情は一定の若者や痲癩持ちの老紳士だけがもつ特権ではない。それは老若男女にほぼ共通した心情と思われる。さらに、「自分探し」が特定の個人において頻回に及んだとしても、そのことによって当の本人が優越的地位に立ったり、逆に非難の対象になったりはしない。この点で「自分探し」は、そこかしこに転がっており、葉にも毒にもなりにくいという意味でどっちつかずのもの、という印象を自ら発しているかに見える。要するに、「自分探し」は、未だ見ぬ理想郷を目指して日常的な事柄から自らを遮断しようとして、失敗するかに見えるのである。超現実的薄志弱行の姿勢を外皮に纏っているのが、この常套句であろうと思われる。恐らくは、その常套句の実質も、外皮の性質から懸け離れてはいないのであろう。

だが、迂闊な物言いは避けなければならない。そもそも「自分探し」とは何かについて定かではない以上、これに対する肯定否定の両意見あるいは折衷的意見にしろ、ともどもさしたる根拠に基づいて述べられるべきものではないことに、予め注意を喚起しておくべきなのである。よって、「自分探し」へと向けられた誠心誠意の努力を無にするような放言は、この脚注においても慎まねばならないことになる。したがって、これ以降は、敢えて述べざるを得ないところの腰折れ文となろう。

さてそこで、「自分探し」なる常套句の厳密な概念規定を棚上げし、これが自然に口をついて出る際に漂う臆気な空気を酌み取ることで、なすべき思案の代わりとすることにしよう。しかし、これがまた、中々に困難である。空気といっても、それこそ自分の胸に常時満たされ無味無臭のものであるから、いざとなると掴みにくく説明し難いのである。そこで、想像力を活発に働かせて、然るべき諸局面に自分を置いてみる必要があるのである。そこで、「自分探し」の旅に出たくなるような意識の状態を、日常生活の現場ないしは良く知られた事例のなから拾い上げてみようという訳である。話の筋から言って、それら各々は、嬉々とした心持ち——遠い昔、遠足に出かける前夜に床に就く際のあの気持ち——が、さらに増すといった心理的局面にあるものでないことだけは確かである。たとえば、脳裏に浮かぶのは、次のような事柄である。

初恋の成就しなかったこと、学業成績の振るわなかったこと、負けられないクラス対抗のソフトボールの試合に惜敗したこと、中学時代の部活動で上下関係の厳しさに接したこと、心底卑しい人品に接し辟易したこと、親族と教え子および恩ある方々の死に際会したこと、人たるもの不確実な現在と将来を生き確

実な死に向かうこと、過ぎ去った事と失った物に対して絶望的に囚われること、マラー（Gustav Mahler）的な諦観に共感すること、騎士トリスタン（Tristan）的な恋の末路と死への願望とを心底に推し量ること、自分の限界を悟了すること、己の精神の「絶対知」から遠くあることの自覚すなわち学問の未熟であること、宇宙の果てを目視できないことに無用の苛立ちを覚えること、および神の御姿を神ならぬ身ゆえ見えぬことを不条理と決めなすこと、さらに不条理と言えば、日本人の多くと鯨との関係は大多数のアメリカ人と牛との関係との麗しい関係から見えて衝撃的なほど野蛮であると見なされること、等々である。

さて、我ながらよくぞ、物珍しくもないが表向きの高尚さを装った、それでいて突飛な物言いができたものである。ともかく、これらの事柄——心理的局面を生成する——に想像力の力で自分を置いてみるとうしよう。その際、この自分が、喜々として「自分探し」を開始するかどうかを推定してみようという目論見なのである。……………

私なら恐らく、沈思凝想を決め込み「自分探し」の旅を中止ないしは延期するであろう。直ぐさま出発するには、どれもこれも「帯に短し襷に長し」の感を禁じ得ないのである。また、全体として眺めてみても、いかにも御し難い心理的局面が一举に揃いすぎたと思われるのである。ここで気づくのは、どうやら「自分探し」とやらは、あまりに日常的に有り触れた事柄、立派過ぎるかも知れない事柄、自分とは無関係と思われる事柄が衝撃的誘引になるとは限らない、ということである。それは明らかに、悩むべき事柄に悩んだ末に惹起する主体的行動ではなく、悩みを探すために、やおら重い腰を上げるかに見て取れる行

動であろう、と推察できるのである。それゆえ、「物心ともに満たされた現状に対する根拠薄弱な空気としての、自分の生活範囲を逸脱しない個人的で臆気な焦燥」が、なんとか見出せる「自分探し」の理由になりうるかも知れない。それゆえ、まずもって、「自分探し」が主体的に開始されるようには、如何にしても見えないのである。

端^{はな}から観察すれば、「自分探し」など不要な確固とした人格が見出せる事例は実に多い。逆に、探すべき自分などありはしないと思われる事例にも事欠かない。人間同士の相互作用を停止状態に置き、社会との繋がりを休眠状態にしておいて、果たして探しうる自分などあるのだろうか。あつたところで、それは「顔なし」としての自分の姿なのではないのか。そうだとしたら、「自分探し」は徒労に終わるのではなからうか。あるいは、その浪費的自己探索こそが貴重な人生訓を構成するものなのだ、と声なき声をもつて頑迷に主張したいのだろうか。

結局、自己の内面を主体的かつ理知的に観察することが求められる。この要求からすると、「自分探し」は、かなり孤独な精神修養の場を含むことになる。それこそ、自分を追いつめる作業に日を費やすことになる。だが、不思議なことに、「顔なし」の暗黙の了解事項として、孤独は誰でもが堪えられる程度に収まるように、その上限が予め設定されているらしい。心身が居場所を得られないほどの孤独に苛まれることは、除去されているという訳である。どうやら「自分探し」とやらは、孤独に堪える試練を含んではいけないらしい。親しみやすい程度の孤独とやらを楽しむ風情すら、そこには見て取れる。それならばこそ、また実際そうこうしているうちに、「自分探し」は一定の流行となってしまうようだ。兎にも角にも、「顔

なし」は「自分探し」を好む性癖があるらしい。「顔なし」が自ら構築した孤立的な人間関係のなかに探し当てられる半孤独な自分とは、果たしていかほど精気ある存在なのか、まったくもって不明である。

我々は探しようる価値のある自分を、どうにかこうにか社会関係のなかで築いていかなければならない。「自分探し」とは単なる自己分析ではない。それは自己分析の対象となる自己を、他者との関係において建設する営為努力に等しい。ある競技種目の重要な試合中においても、その勝敗の決する瞬間においても、自分を見出し向上させる契機に満ちている。修験者専用の滝に打たれずとも、未明の比叡山中を夜半から駆け巡らずとも、それは普通の生活のなかで可能なのである。もとより、旅になど出なくても、それは達成されるのである。苦痛や絶望の際を、おっかなびっくり無理やり体験する必要はない。それらは、幸福な人生の途上に、いつの日にか否応なく訪れる可能性があるものばかりである。

しかし、敢えてこれを行うなら、いずれも熱心になさるべきである。例えば、寒風吹き荒ぶすま厳寒の竜飛岬に立つて麗らかな早春の備前牛窓の海をなお心中に観ようとすると、その知的努力は想像力とともに見上げたものである。それは意識の両極的経験の自覚的統一とでも称すべき、自己の内面的変化を帶動する哲学的思索を含んでいるはずである。ならば同様に、書物のなかにさえ「自分探し」の可能であることを認めて良いであろう。荒れ狂う激情さえも、書物は静謐のうちに語るからである。書物に向かう静かな学生と接するのは気持ちが良い。もし、その学生が生身の哲学を欲するならば、現実の人間関係に身を晒すが良い。書物のなか以上に心地よい人とのつながりや逆に渦巻く葛藤に苛まれ、自分とは如何なる存在かが常に問われるであろうからである。

なお、自分を相対化されることに對する嫌気の念が、少なからず見受けられる。このことを我々は、利己主義の盛行として考えて良いのであろうか。個人はどれほど自分を絶対化したところで、独りでは生きてゆけない。それゆえ、自ら進んで自己を相対化する営為が求められる。これこそあるべき姿であり、個人主義の目指すところであろう。確信的に自己探索を開始した者には、自己否定の香気が漂う。既にして、積極的なものを、その者は変化の契機として見出しているのである。改めて「自分探し」をする必要はないと思われる。そこには立派な自己が存在しているし、主体的に個人主義を自らに実現させてゆくものとされる。利己主義が個人主義に及ぶ所ではない。

ともあれ、世に言う「自分探し」が「顔なし」によるものでなく、またそれが純粹に始められたならば、誰彼の行いであるかを問わずとも、その成就を祈らずにはいられない。ここでも、意識は後戻りできないからである。この社会の金銭的文化をフィルタ―なしで吸い続けるよりは増しであろう。着手してしまつた以上、それは継続されるべきである。世に「継続は力なり」と言う。継続中の「自分探し」さえ見限つて苦言を呈する資格は自分には絶無であり、まずもつて不要である。継続は物事の一切を変化に導くはずであり、その営為は原初の自己を探し当てるであろうから、程なく彼はエリオット (Thomas Stearns Eliot) 的な意味での「探究者」となるであろう。そう、願いたい。「自分探し」は「探究者」に向かつて成長する精神の経験の旅であつてもらいたい。それこそが知的な営みだからである。—— Cf. Thomas Stearns

Eliot, *Four Quartets* (New York: Harcourt, Brace and Company, 1943.)

(10) 三木 清著『人生論ノート』新潮社、平成十二年刊、三十六ページ。

- (11) Ernest Hemingway, *The Sun also Rises*(New York: Scribner, 2006), p. 19. 「高見 浩訳『日はまた昇る』平成十五年刊、二五〇ページ」。
- (12) この叙述部分は、本論で述べておいたように、ヘーゲル著『精神現象学』の一節に手を加えて出来たものである。その一節の出典をしまじらかにしておく。——Georg Wilhelm Friedri Hegel, *Phänomenologie des Geistes*(Hamburg: Verlag von Felix Meiner, 1952), SS. 222-223. 「長谷川 宏訳『精神現象学』作品社、平成十年刊、二五四ページ」。
- (13) Thorstein Veblen, *The Theory of Business Enterprise*(New York: Charles Scribner's Sons, 1904), p. 139. 「小原敏士訳『企業の理論』勁草書房、昭和四十年刊、一一一ページ」。
- (14) William Shakespeare, *Macbeth*(Ware, Hertfordshire, England: Wordsworth Editions Ltd, 1997), pp. 97-98. 「松岡和子訳『マクベス』筑摩書房、平成八年刊、一六九ページ」。
- (15) *Ibid.*, p. 102. 「同上訳書、一七八ページ」。
- (16) 本稿は、平成十九年九月二日に脱稿した。
- (17) 私的所有権の確立なしには市場社会は機能しないし、産業革命の全面的出現も想定できない。イギリスの産業革命前夜の経済学者であるアダム・スミス (Adam Smith) が、その著『諸国民の富の性質と原因に關する研究』(*An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 1776.) を世に問うことができたのは、私的所有権が確立していたからである。この点で、ジョン・ロック (John Locke) の果たした貢献は多大なものがあると言わねばならない。ロックによってなされた「所有権の正当化」——スミスを遡る

こと百年の昔に彼自身によって着手された——は、労働生産物のうちの余剰分が市場で交換されることを通じて「交換経済の正当化」に成長していたのであった。実は、スミスの時代には市場社会は存在しており、そこで彼は、分業とその生産性についての議論を深めることができたし、価値を労働の観点から論ずることができたと思われる。

- (18) Max Weber, *Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus*, *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, Bd. I (Tübingen: C.B. Mohr, 1920). [梶山力訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、有斐閣、昭和十八年刊]。

- (19) Werner Sombart, *Der moderne Kapitalismus: Historisch systematische Darstellung des gesamteuropäischen Wirtschaftslebens von seinen Anfängen bis zur Gegenwart* (München: Verlag von Duncker & Humblot, 1909). [岡崎次郎訳『近世資本主義』生活社、昭和八年刊]。Werner Sombart, *Die Juden und das Wirtschaftsleben* (Leipzig: Verlag von Duncker & Humblot, 1911). [ヴェルナー・ゾンバルト著、金森誠也訳『ユダヤ人と経済生活』荒地出版社、平成六年刊]。Werner Sombart, *Krieg und Kapitalismus: Studien zur Entwicklungsgeschichte des modernen Kapitalismus* (München u. Leipzig: Duncker & Humblot, 1913). [ヴェルナー・ゾンバルト著、金森誠也訳『戦争と資本主義』論創社、平成八年刊]。Werner Sombart, *Der Bourgeois: Zur Geistesgeschichte des modernen Wirtschaftsmenschen* (München: Duncker & Humblot, 1913). [ヴェルナー・ゾンバルト著、金森誠也訳『ブルジョワ——近代経済人の精神史——』中央公論社、平成二年刊]。

- (20) Ljubo Brentano, *Der wirtschaftende Mensch in der Geschichte* (Leipzig: F.Meiner, 1923., Reprint: Hildesheim,

Olms, 1967).〔田中善治郎訳『近世資本主義の起源』有斐閣、昭和十六年刊〕。Lujjo Brentano, *Das Wirtschaftsleben der antiken Welt* (Jena: Fischer, 1929).〔舟越康壽訳『歐羅巴古代經濟史概説』日本評論社、昭和十九年刊〕。

- (21) Richard H. Tawney, *Religion and the Rise of Capitalism: A Historical Study* (London: John Murray, 1926 & 1937); Richard H. Tawney, *Religion and the Rise of Capitalism: A Historical Study* (New York: Harcourt, Brace & Company, 1952).〔出口勇蔵・越智武臣訳『宗教と資本主義の興隆——歴史的研究——』上・下巻、岩波書店、昭和三十一年刊〕。

(22) 東京都北区上中里の中里貝塚は、縄文時代中期中頃から後期初め(約四千六百〜三千九百年前)にかけての海浜低地に形成された巨大な貝塚——最大で厚さ四・五メートル以上の貝層が広がる——である。中里貝塚には、經濟活動と技術的成長の痕跡を見て取ることができる。そこは「水産加工場」を擁し、海産物の養殖と出荷が計画的に行われていたと推測されている。また、焼き石を投入して水を沸騰させて貝のむき身を取ったと考えられる土坑や焼き火跡、木道などが確認されていることから、文化的成長は明らかに確認できる。計画的な生産活動とその体制、施設を建設し維持管理するための技術知識とその実行力、原材料の搬入——蠟ないしは蛤を採取加工している——と生産物の搬出——大量の加工海産物の内陸への供給——、および幅広い交易の存在等々の經濟活動が想定できる。また、共同作業場での個別的分業のみならず、社会的分業が存在したと推定できる。生産計画の策定や修正、交換先の選定、「納期」と生産数量について指示監督する役回りの者が、比較的責任ある立場に現れていたであろう。そうでなければ、持

ち場を分担する人的組織は上手く機能しないはずである。その「水産加工場」においては、蠣と蛤の加熱処理に力量を発揮した人間が、その他のすべての生産工程で同じ才覚を発揮できたかどうか疑わしい。緩やかに持ち場を守りつつ、専門性を高めていったのではなからうか。流通に専門的に携わる者が現れてきたことであろう。極めて素朴な契約の観念が慣習的に発生していた可能性もある。手間の掛かった加工海産物を不確かな相手を交易の抛り所として繰り返し行うなどということは、余剰生産力の毀損に無感覚な人々であったとしても、避けたであろう。効率を追求する本能は、彼らの内面で停止状態になっていたとは考えられない。むしろ、「水産加工場」の経営についての臆気ではあるが実効力のある制度が定着していたと考えられる。ともあれ、素人の憶測はここまでにしよう。

なお、中里貝塚の詳細は次の書物によって、精確な資料分析を含めて知ることができる。——中里遺跡調査団編『中里遺跡——発掘調査の概要Ⅰ——』東北新幹線中里遺跡調査会、昭和五十九年刊。中里遺跡調査団編『中里遺跡——発掘調査の概要Ⅱ——』東北新幹線中里遺跡調査会、昭和六十年刊。これらに加えて、次の書物の併読を勧めたい。——永山久夫著『和食の起源』青春出版社、平成十二年刊。